Phongsounthone SOMESANOOK

Student Number: 20-8601-504-0

**Academic supervisors:**

Assoc. Professor Katsuya YAMAMOTO

Professor Daisuke KOGA

Assoc. Professor Hidetomo SAITO

## Abstract

This dissertation aims to explore the adoption of fintech to improve the efficiency, stability, and social impact of microfinance institutions (MFIs) for financial inclusion in Laos. In Chapter 2, we delve into the current state of financial inclusion in Laos and identify the primary barriers and challenges obstructing its progress. Additionally, we analyze the role of MFIs in advancing financial inclusion within the country. In Chapter 3, we examine MFIs' performance and credit default risk using CAMEL rating systems, allowing us to gain a comprehensive understanding of their financial health when extending loans to underserved populations. The findings highlight the importance of MFIs' risk management and financial stability in advancing greater financial inclusion.

Chapter 4 concentrates on the role of fintech, exploring its potential benefits and risks for enhancing the efficiency, stability, and social impact of MFIs in promoting financial inclusion in Laos. This study establishes the groundwork for fostering more inclusive and sustainable financial practices in the country. Furthermore, it emphasizes the necessity of addressing fintech-related risks as well as balancing the relationship and transaction banking to fully maximize its potential for MFIs seeking to enhance their efficiency, stability, and social impact through fintech adoption.

To understand the factors that affect fintech adoption in MFIs, we develop a theoretical model in Chapter 5 by extending the Technology Acceptance Model (TAM) with perceived risk, government support, and regulation. Surveying managing directors from MFIs provides useful data, and the

effectiveness of the extended TAM is validated through Structured Equation Modeling (SEM). This study contributes to theoretical development by enriching TAM with additional variables. Applied this extended model in the context of MFIs in Laos, it provides a more comprehensive understanding of fintech adoption, strengthening TAM's credibility, and contributing to a robust theoretical framework for fintech adoption within the scope of MFIs. Consequently, our study provides practical guidance for practitioners seeking to strengthen influential factors and overcome obstacles in the fintech adoption of MFIs.

Through an examination of the situation of financial inclusion in Laos, the role of MFIs in driving financial inclusion, their performance, credit default risk, and fintech adoption, this dissertation demonstrates the potential of fintech and its role in improving the efficiency, stability, and social impact of MFIs for financial inclusion in Laos. Ultimately, it may contribute to the advancement of the country's financial ecosystem and support societal progress.

（様式９）

# 学位論文審査の概要と結果

| 報告番号 | 東アジア博 甲　第１７０号 | 氏　名 | PHONGSOUNTHONE SOMESANOOK |
|---|---|---|---|
| 論文題目 | A Comprehensive Study of MFI Performance, Credit Default Risk, and Fintech Adoption：To Improve Efficiency, Stability, and Social Impact of MFI for Financial Inclusion in Laos<br>MFI のパフォーマンス、信用デフォルトリスク、フィンテック導入に関する包括的研究：ラオスにおける金融包摂のための MFI の効率性、安定性、社会的インパクトの改善に向けて | | |

## （論文審査概要）

Ⅰ 学位論文の内容

本学位論文は、ラオスにおける金融包摂の進展にとって重要なアクターとなりうるマイクロファイナンス機関(MFIs)の効率性、安定性、そして社会的影響力を改善するために、フィンテック採用の可能性を明らかにしようとする。

本学位論文の構成は、以下の６章と Reference、Appendix からなる。

1. Introduction
2. The role of MFI in driving social impact through financial inclusion in Laos
3. Examination of MFI's performance and credit default risk
4. Benefit and risks of fintech solutions for improving the efficiency, stability, and social impact of MFI
5. Developing the Technology Acceptance Model (TAM) to examine fintech adoption in MFI in Laos
6. Conclusion

第１章では上述した学位論文の目的が背景とともに提示される。第 2 章において、ラオスにおける金融包摂の現状をデータによって総覧し、その進展の阻害要因と課題を特定している。ラオス政府が金融包摂に対してどのような政策を実施してきたかについてラオスにおける経済自由化以後の金融市場改革の経緯とともに確認したのちに、ラオスの金融部門を主に構成する銀行、Village Funds (VFs: 村落コミュニティにおける非公式な金融)や MFIs についてそれぞれの現状と課題を挙げる。特に、MFIs の店舗数や融資残高、預けられた貯蓄残高の爆発的な増加に注目し、MFIs が金融包摂の推進を担う重要な位置にいるが、貧困者への貸付がもたらす安定性への懸念が課題であると主張する。第３章では、金融機関の健全性評価に用いられる CAMEL システムのデータを用いて、MFIs の経営成績とクレジット・デフォルト・リスクを分析する。金融アクセスのない人々への融資が健全性に及ぼす影響を明らかにしつつ、さらなる金融包摂のためには MFIs のリスク管理と財務的安定性が重要であると主張する。第 4 章ではフィンテックに注目し、前章での課題解決に対する有効性を検討し、MFIs のコストとリスクを管理可能になるかを明らかにする。また他方で、新技術がもたらすリスクにいかに対応するかについて検討している。第 5 章では、これまでの技術受容モデル（TAM）を知覚されたリスク、政府による支援、規制といった要因によって拡張し、MFIs の経営責任者へのアンケート調査に基づくデータを用いて、構造方程式モデリングによって実証分析を行っている。その結果、政府の支援や規制のあり方がフィンテック採用に大きく影響することを明らかにし、第 6 章においてラオスの金融包摂推進のために政府が MFIs を支援する方策を提示している。

Ⅱ 学位論文の評価

１．創造性

技術受容モデル（TAM）をラオスの MFIs によるフィンテック導入意図の分析に適用し、そのモデルに知覚されたリスク、政府からの支援、そして規制といった新たな要因を加えて拡張し、実証分析を行なったことは、TAM を用いたこれまでの先行研究への実証的貢献として評価できる。また、こうした分析の準備として、ラオスにおける金融包摂の現状をデータによって確認し、金融サービス提供

者（商業銀行、VFs、MFIs）それぞれの現状と課題が明らかにされている。したがって、全体として創造性において達成できていると評価する。

２．論理性

全体的な論理構成としては、ラオスの金融包摂状況から解き起こし、その進捗状況が芳しくない原因を各金融サービス提供者の経営状況に求めている。そのなかでも MFIs が今後のラオスの金融包摂にとって重要なアクターとなることが期待されることから、その経営状況の吟味やフィンテック採用の可能性といった検討に進み、その展開は一貫性のあるものとなっている。また、各章においても、第５章の TAM を用いた実証分析は適切な手続きに基づいて仮説が検証され、結論が導かれている。フィンテックが MFIs の経営改善や金融包摂への最適解であるという主張や MFIs の経営分析については仮説検証型の実証手法が取られているわけではなく、その説明力には限界があるが、総合的に判断すれば、全体として論理性において達成できていると評価する。

３．厳格性

技術受容に関する理論的な先行研究の渉猟・分析には不十分な点があるが、挙証に用いられている証明資料やデータ、またその方法は厳格に用いられている。したがって、全体として厳格性において達成できていると評価する。

４．発展性

途上国における金融包摂は国連、IMF など国際機関が注目する重要論点であり、この進捗に関する本学位論文の貢献は重要な意義を有する。しかも、マイクロファイナンスの営利化（営業利益重視）が貧困層の重債務問題を生じていることが告発される中で、ラオスの MFIs がこの「営利化による経営の安定化」と「貧困削減という社会目標」とのバランスをどのように取るべきかという論点を本学位論文は提示している。この点に関する明示的かつ説得的な論考は十分に提示されてはいないものの、今後の発展的研究の土台となる可能性を有している。この点において、発展性において達成できていると評価する。

Ⅲ 全体の評価と審査結果

全体的な評価としては、これまでの先行研究に基づいて TAM に独自の要因を組み込み、拡張し、これをラオスという特定の文脈に適用して行われた実証分析（第５章）は、当該分野における実証的貢献をなすものと評価できる。また、ラオスの金融包摂の背景として、ラオスの経済自由化そして金融システム改革の経緯についても中央銀行による法的規制の観点から丁寧な整理、分析がなされている。第５章の分析へとつながる CAMEL システムを用いた MFIs の経営状況分析（第３章）、フィンテックの可能性に関する分析（第４章）は仮説検証型ではなく、実務者目線での分析と見られる面もややあるが、全体的な論理展開は厳格性を十分に有している。他方で、課題も残されている。実証分析手法をさらにブラッシュアップすることはもとより、例えば、自己資本比率の高さと総資産利益率の低さに関して典型的な MFIs の経営例を挙げた説明や、それと関連したラオスの MFIs の特徴（できれば国際比較に基づいて）といったものの抽出が不十分である。こうした点は今後の研究課題として継続して取り組むことが強く望まれるが、直ちに本学位論文の意義と貢献を減ずるものではない。これらの点を総合的に判断して、本学位論文について全体として達成できていると評価する。

以上より、審査委員会は学位論文審査結果を「合」と判定する。

| 論文審査結果 |
| --- |
| 合・否 |

審査委員　主　査　（氏 名）山本勝也

（氏 名）古賀大介

（氏 名）渋島清史

（氏 名）齋藤英智

（氏 名）内田恭彦